



秩父宮雍仁親王殿下写真集

ヨーロッパにおける



1982年(昭和57年)

7月号(No. 445)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

ヨーロッパにおける

秩父宮雍仁親王殿下写真集……………(1)

海外の山では……………(1)

山岳史懇談会

——昭和初期の早大山岳部——

図書委員会……………(2)

図書紹介……………(3)

「遙かなりエヴェレスト」「山なみ帖」

「雪嶺秘話」「ら・もんたあにゆ」

第19回「この一本展」より

(最終回)……………(4)

東西南北……………(6)

お知らせ……………(7)

図書委員会、科学研究委員会

支部だより 北海道支部、静岡支部、熊

本支部、信濃支部……………(8)

追悼 名誉会員 津田周二氏逝去……………(9)

会務報告・ルーム日誌・会員移動

……………(9)~(11)

図書受入報告 図書委員会……………(10)

1981年発行会員名簿正誤表……………(10)

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時~20時

水、金曜 13時~20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日

13時~20時

▶夏休み 8月9日(月)~14日(土)

海外の山では

英チヨモランマ登山隊にまたもや悲劇が見舞った。「五月十七日、二人(ジョー・タスカール三三、ピーター・ボードマン三三)が八二〇〇の地点に登る姿を確認した」と、ベース・キャンプのクリス・ボニントン隊長が北京に報告してきた。しかし、その日の午後三時と七時の二回の定時交信には応じなかったのである。

ボニントンはその後、二十八日までカンシュン氷河周辺にいたるまで捜査活動が続けたが消息はつかめず、六月四日成都に失意のうちに帰着した。

この欄でも紹介したが、大量作戦の日本のチヨモランマ隊とは対照的に、ボニントン隊は六人で、タスカール、ボードマンの二人でアルパイン・スタイルによる東北東稜の初登攀を狙った。サミッターの二人は、十三日BC(五二〇〇)を出発、十四日六四〇〇、十五日七二〇〇、十六日七八五〇と、アドバンス・キャンプはいずれも雪洞を構築していた

山をきれいに「三」は持ち帰る

遭難の二人は昨年、ボニントン、アラン・ラウスとともにコングール(七七一九)南面のコク・セル氷河のBCから同峰へアルパイン・スタイルで初登頂に成功したほか、七九年にはカンチエ・ジュンガ無酸素登頂を、またタスカールは一九八〇~八一年の冬期エベレスト西稜登頂に参加(これは不成功)、チャンギヤバン初登頂の記録もある。またボードマンはエベレスト南西壁の第二登を果たした。第一登はデュガル・ハストンであったが、ボニントン・チームのうち、さきにハストン(欧州アルプスで雪崩遭難)、そして今回の二人と計三人までを失うことになった。

しかし、ダグ・スコット(四一)の率いるシシヤパンマ(八〇一二)隊は、五月二十八日、アレックス・マッキンタイヤー(二八)とロジャー・バクスター(三三)が登頂した。二十三日四八〇〇、二十六日七〇〇〇、二十七日七五〇〇

留守番電話(電話番号231-六六五九)

ようだ。十六日の最後の交信によれば、この地点から頂上へうかがう予定であり、登頂を果たしたかどうかとも定かではない。いずれにしても、一九二四年六月八日、北東稜を第五キャンプから第六へ向かっていったオデーが、午後零時五十分、第一ステップ付近で見失ったマロリ、アービンの悲劇と二重映し

第十回

山岳史懇談会

— 昭和初期の早大山岳部の動向 —

図書委員会

今回は早稲田大学山岳部の昭和初期のバイオニア事績をとりあげた。お招きした講師は、五十嵐俊治、今井友之助、折井健一、池野元章の各氏、いずれも穂高、劔の積雪期ヴァリエーション・ルートを開拓した方々である。

まず昭和三年に早稲田に入学された五十嵐氏から、当時の山岳部活動の「思想的背景」についてお話があった。登山の大衆化が叫ば



マッターホルンの尾根を行かれる殿下；1926. 8. 31. (四ッ切)

真の一部は日本山岳会にも頂いて、ルームに飾る希望が出されていたが、複写の完成した際、複写や焼付の費用は凡て宮家で受け持たれた上、六葉をこ下賜頂いた。

秩父宮妃殿下のご厚情に対し、日本山岳会会長はじめ会員一同、心から感謝申し上げます次第である。

昭和五十七年

五月十日

(中村純二)

(四葉は次号会報に掲載します)

れ、関東・関西学生山岳連盟が結成された時代、早大山岳部もひろく一般学生に登山を呼びかけ、昭和四年などは年間七〇パーティが山に登ったという。

一方、早くもそのころから、スポーツ登山ないし戦闘的登山への気運が高まり、中堅部員によるヴァリエーションのアタックが積み重ねられて行く。それが一挙に開花したのが、昭和七年の積雪期の

りと高度を上げていた。同峰はこれまで初登頂の中国隊のほか、日本、西独、オーストラリアの登頂がある。ついでながら大分岳連は同峰西峰(七二九二)に今シーズン登頂した。

その他のビッグ・ニュースは、メスナーがカンチエンジュンガ北壁無酸素登頂によって、八千四百十四座中七座九回目の登頂を果たしたことである。

(片山金平)

最近の「Die Alpen」にはマカル(八四七五)に登頂したフォン・ケネルのことが載っている。



松家晋 撮影 今井の各講師、折井、五十嵐より

の金山淳二、谷口現吉氏が上半部を登攀しており、四日には早慶がそれぞれ上半下半部を分けあった(慶応は下半部を下降)。

面白かったのは、今井氏が「四日に八ツ峰上半部へ行ったら、慶応の人たちが前日「降りて行った足跡」があった」と話されたことである。

懇談会に「現場証人」として出席された谷口氏がさっそく訂正された。「上から降りるなんて恐ろしくてできなかった。しかし早稲田の人たちが、われわれが降りたと思っていたとは、今の今まで知らなかった。ちょうど五〇年たって知った新事実。

劔・八ツ峰登攀と、同年から九年にかけての氷雪の穂高・滝谷各尾根への集中的な登攀であった。

八ツ峰については今井氏が話され、池野氏が補足された。昭和七年四月二日は快晴で、早大隊の他に東大の小川登喜男氏も八ツ峰下半を登攀、三日に慶応大学山岳部

るが、四二才で八千峰の第五座目の登頂を果たし賞を受けたと報じている。一九七八年に四七才のクルト・ディームベルガーが八千峰四座目をエベレスト登頂で果たしているが、このところ四九才のビエール・マゾーやポーランド冬期エベレスト隊のジグムント・ハイシリッヒ(四二)、近くはソ連隊のエドワード・ミスロフスキー(四五)など四〇才を越えたアタッカーが八千峰に何座登れるかが注目され出したようにみえる。メスナーを意識した古参の意地とも挑戦ともそれうだ。

(岡沢祐吉)

のうらみ、伝説的豪傑たちの人物像などが中心になった。他の講師の方々のお話にもしばしば登場した一人の岳人の姿が、くっきりと浮かびあがる。昭和十三年に夭折された出牛(じうし)陽太郎氏。「私の幸運は優れた先輩に恵まれたことだ」と折井氏は何度も強調された。

だが、今回の懇談会の庄巻は、なんとといっても五十嵐氏による早大山岳部の幻の大記録の克明な報告であろう。昭和九年四月下旬、五十嵐、池野、相模部にいた陰山栄之助、それにスキー部岡崎祐男の四氏は槍ヶ岳立山スキー縦走を計画した。日程は一日(こまかくいうと午前二時槍平出発、午後七時立山温泉到着の予定)というところが素晴らしい。

まず前段トレーニングとして北海道に渡り、人跡まれな知床半島を歩き回り、四月下旬に槍平に入った。スキー部と相模部の学生が

一人ずつ参加したというのがおかしい。案の定この相撲部がのちにブレイキになった。

ある快晴の日、深夜出発して千丈沢乗越で西鎌尾根に上がったのが午前四時三〇分、北上して双六岳の登りにかかるころ相撲部がバテはじめ、三俣蓮華、黒部五郎、上ノ岳と一山ごとに予定よりピッチが遅れる。スゴ乗越のあたりで夕方になり、おまけに道をまちがえて時間を食ひ、月明りの下で越中沢岳を越えたが、とうとう鷲山の手前で予定外のビバーク。夜明けとともに行動を再開して、午前四時三〇分に立山温泉着。

稜線に出てからきっかり二十四時間、快挙、大記録であることに変わりはない。翌日は、のんびりと道草を食ひながら、ザラ峠、五色原(迷う)、刈安峠(熊におびえて迷う)、平(泊り)、針ノ

木(立教パーティと交歓)、大沢。シールは水を吸って重くなるのでスカーレをスキーに塗ったというお話も興味深く、この幻の記録の初公表は大喝采を博した。

出席者・五〇音順 秋山幹夫、荒野康子、安彦六郎、泉 久恵、岩瀬皓祐、宇津力雄、大島輝夫、太田 敬、大橋 晋、岡沢祐吉、小倉童子、小倉茂輝、織田沢美和子、金坂一郎、北村明久、越田和男、児玉 茂、小林 碧、佐々保雄、齊藤 桂、齊藤健治、島田 異、菅野弘章、砂田定夫、高澤英雄、滝川 清、武田満子、谷口現吉、千葉重美、千葉保之、沼倉寛二郎、濱野吉生、平井拓雄、平井吉夫、平戸孝夫、松家 晋、松下肇、山口一孝、山崎安治、山崎金次郎、山村正光

(平井吉夫)



図書紹介

遥かなりエヴエレスト

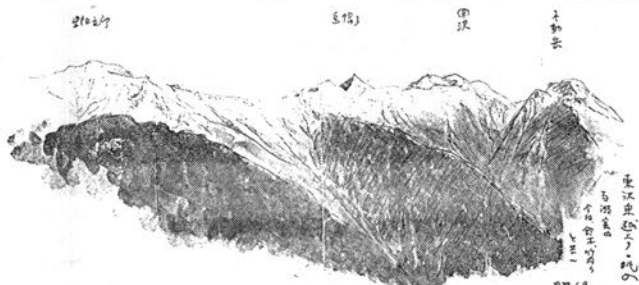
―マロリー追想―

島田 巽 著

著者がいつかはと長い間暖めていたテーマ、いうならばマロリー

物語りを、ティンドールの「マウンテン・パス」、デヴィッド・パインの「マロリー回想記」、そしてロバートソンの「ジョージ・マロリー伝」を続糸に、その他アルパイン・ジャーナルをはじめ三十冊に及ぶ文献(本書巻末に記載)を横糸として織り上げた一大叙事詩ともいうべき傑作である。

話は、マロリーと彼の恩師、英国山岳会の巨星といわれる人たちとの数々のエピソードにはじまり、それからそれへと展開してい



東沢乗越より野口五郎、鳥帽子、南沢/吉阪隆正

く。その手法は、さすが老練なジャーナリストとしての非凡さが、いかに発揮されているか、とこのほかに、終始読者をしめて飽きさせない。

ウィンチェスター校でマロリーは後年英国山岳会の名誉会員ともなる良師アーヴィング先生とめぐり合う。そしてアルプスへつれて行かれ、少年期早くも岩と雪の洗礼を受けた。このパブリックスクールで、先生とマロリーとの間にも羨むような恩師と愛弟子とい

う美しい間柄が生まれ、ひき続き進んだケンブリッジのカレッジでは先生の意に反してポートに熱を上げてしまい、アルプス行も休み勝ち、恩師に気をもませるのである。

在学中彼はフエビアン協会に入会し活動したという。よほどの進歩的理想主義者だったらしいマロリーのかなり強い個性について、著者はいろいろなところで照明をあて、その人間像を多角的に浮き彫りにしている。

ポートの主将をやリ、社会主義の飯を喰ったリして、登山家としては随分道草を喰ったかのようにみえるけれども、それだけに、単なる山屋ではないマロリーであることがよく説明されていて教えられるところが多い。

アルプスで磨きかけたマロリーのエヴエレストへの出番を告げる舞台回しの演出としては、「未知への挑戦であったころの先蹤者の苦心が忘却の彼方に追いやられて、苦闘の歴史の上に花ひらいた今日の成果だけが、もてはやされるように」は困る」と著者はエヴエレストへ遠征隊が送り出される経過と背景とをかなり克明に詳述している。既に三児の父となり、また母校ケンブリッジの講師の職も内定していたマロリーにとって、第三次隊に参加するかどうかは人生の重大事であった。彼の心は微妙にゆれ動く。苦しい選択を迫ら

れるいきさつが活き活きと、いかにもドラマティックだ。

ところで、西洋の山の本は実にたくさん日本語に移されているが、日本のそれはほとんど外国の文字になっていない。本書のように登山をやらな人にも興味深く読める本で、しかも登場人物に英国人が多いこの物語りは、もしも英文で書きおろされるか、あるいは英訳して出されるとしたら、日本でよりもっと反響と関心をあつめるのではあるまいか。

手ざわり爽やかな装幀造本も、宮下啓三、神崎忠男両氏のカットのスケッチと共に好感をさそう。写真や地図などをむやみと入れないほうが、本書のような気品のある内容にふさわしいことは、私も著者と同じ考えだ。しかし欲をい

わしてもらえば、マロリーに関する略年譜でもよいから、それらしいものがついていたら、どんなにか本書を読む手助けになったろうかと思った。版を重ねる機会には是非著者の労を煩わしいところである。

なお、本書には三〇部限定の特装本がある。これは著者が本年喜寿を迎えた記念として知友に傾けるためつくられたものと聞いている。

四六判、二七八頁、昭和五十六年十一月、大修館書店刊、一五〇〇円

(織内信彦)

山 な み 帖

小谷隆一著

山の世界にも本好きは多いが、その最右翼に名を欠くことのできないのが小谷氏で、自他ともに認める当代の Bibliophile であろう。北杜夫著「白きたおやかな峰」の魅力的な「小滝隊長」の記憶と重なる、小谷氏の実体(生活と意見)を知りたいと思っていた者には、長く待たれた一書であった。

「山なみ帖」という書名は、旧制松本高校卒業時に恩師や友人に記念の言葉を書いてもらったノートの名前だという。その由来から旧制松高の生活を回想する一文を読んでいると、戦乱の時代に心豊かな日々を精一杯生きていた有様がうかがえて、まことにうらやましい。著者もまた「こうした旧制高校の生活を味わえたことをこのうえもない幸福」と語っているが、Bibliophile への資質は、そうした日々に育まれていったのであろう。アルプスやヒマヤラの紀行も含まれているが、そのどれにも、旧制高校の持っていた独特の情感とロマンチズムとをうかがうことができる。山の本を集めながら、ふえつづける本の山に悩んで、昭和の年号の終る時に新刊書の購入をストップすることにきめ、早く昭和の年号が変るようになると、右翼に聞かえたら安くはすま

ないような感想がとび出てくるのも、旧制高校の名残を感じさせる。こうしたことから、『どくどくマンボウ青春記』と併せて読むと一層興味深い。

本書中の圧巻は、何といっても「コレクターの悦び」であろう。Bibliophile の面目がまことにみごとにあらわれていて、特にカードの整理にかける情熱、その手順と方法は、読んでいただけで気が遠くなってゆく。留守中の火災を心配して旅先から国際電話をかけたり、十トン以上の重量に耐える鉄骨の書庫をつくったりと、まさに Bibliophile の面目躍如である。

万巻の書物よりも大地のほうが多くのことを教えてくれるとフランスの作家は言った。もちろんその意味は違っても、小谷氏の収集話を読んでみると、山の本は、山に登ることと同等、あるいはそれ以上に多くのことを教えてくれるものだというのが、やはりよくわかるのである。

蛇足ながら気になったことを二つ三つ。135頁の3行目、メルル氏(M. le Maire)とあるのは市長または町長、136頁7行目メルケータ(Marchon)は、新図法を考案した十六世紀オランダの地理学者だからメルカトル、301頁最終行シャーレマン皇帝は、シャルルマーニウとそれぞれ記していただくほうが、一九八〇年代の本として

はふさわしかったと思う。特に前者は、地名の読みを詮索する文の中だけに一層くやしい。

なお、はさみ込みのしおり月報は、辻邦生、北杜夫、島田巽、近藤信行、塚本圭一執筆という豪華版。

茗溪堂刊、三二〇〇円
(大森久雄)

雪 嶺 秘 話

伊藤孝一の生涯

瓜生卓造著

サブタイトルにあるように、わが国の登山史上のユニークな登山者である伊藤孝一の生涯をあつかった作品である。

伊藤は名古屋市の屈指の素封家

「京吉」の七代目の後継ぎであるが、一切は番頭以下に委ね、伊藤は有り余る金と時間を使っての趣味三昧の生活である。

まことに結構な身分と言うべきであるが、本人にとっては生き甲斐の少ない空しい日々である。そのような伊藤にとって最大の道楽は山であった。特に日本アルプス

第十九回

「この一本展」より(最終回)

十三、サラディン・山の為の

ひとつの人生

アンネマリ・シュヴァルツェンバツハ著
ベルン市ハルヴェグ社刊
一九三八年

戦前の三〇年代ソ連領の山で活躍したスイス登山家ロレンツ・サラディンの小伝。SAC後援のコーカサス遠征、ソ連のパミール学術探険等に参加、三六年九月ソ連登山家アバレーコフ等と天山の鋭峰カンテングリを登頂、帰路凍傷敗血症で落命。

戦前ソ連は冷視されていたのでサラディンの死も一冒険家の死として小さく報ぜられただけだったが、ひとりの若い女性がモスクワに赴き故人の手記と写真入手し、北南米で下積み放浪の半生を過ごし、四十才で果てた最後の数年まで、ソ連領での特記に値する足跡を残したこの知られざる登山家のため、追憶の小伝を書いた。サラディンはスイスを訪れたヘディンからイシュクリ湖の奥にあるカンテングリの存在を教えられた。この縁からヘディンはこの書に故人の勇ましさをたた

える莊重な序文を寄せている。ついだが、ヘディンはそのなかでカンテングリを七二〇〇ととし、サラディンの業績を初登と扱っている。当時の西欧の知識を書いているわけだが、戦後ソ連情報では三一年にウクライナ隊が初登、三六年夏にアルマタ隊が二登、但し、両登ともに疑点が残っている。高度は六九五〇、従ってサラディンの三登になるだろう。以上ソ連通の田村俊介君の話である。

本書は三八年上梓されたが、戦乱で主人公も著者もスイスでは忘れられてしまった。しかし田村俊介君の話では、ソ連の登山界ではサラディンはよく覚えられていると云う。

戦時チューリヒで天山やパミールの美しい写真に惹かれて入手したが、爾来失われもせず私についてまわった。シルクロードばやりの今日、本の主題が天山なので「一本展」に出す気持になり頁をめくると、半世紀近い歳月がこのつつましい本を、戦前のスターリン治下のロシアを映す貴重な読物にしていることに気がついた。コウカサ山中での百人ものレニングラード大学山岳部の連中との交歓、モスクワで出会うゴルキーの大衆儀やヴォロシロフ元帥を先頭とする大デモ、その他古代さながらの牧人等。今、色あせた装丁に目をやると、その昔、他人の遠征手記をたよりに懸命に文を綴った若い女性著者のその後の運命等に思い

の自然と山男達は伊藤の心をとらえて放さない。

第一次大戦が終り、世はまさに日本アルプスの開拓の時代である。伊藤は想像を絶する資金を投じて、その開拓の一端を担うことになる。薬師岳冬の初登頂をはじめとする数々の実績が残っている。特に、伊藤が試みた山岳記録映画の撮影は話題を呼び、その成果は当時としては世界的なものとして賞讃された。このフィルムが天覧の榮に輝き、伊藤が宮中に伺候する場面は興味深い。

この作品の前半は、大金持伊藤の順境にありながらも、孤独な時代を、伊藤の山行のドキュメンタリーとオーバーラップさせた形で描いている。ドキュメンタリーといっても伊藤自身が残したのは作品中にみられるような極く簡潔なメモ程度の日記に過ぎず、殆どはそれを基にした著者の創作である。にも拘らず、そのみずみずしい描写と、生々しいばかりの臨場感は一驚に値する。思うに、これは筆力だけではない、著者の山に関する認識と山への愛着のなせる業であろう。自然も人間達も、著者の愛情豊かな眼を通しての故もあって、極めて魅力的である。作品の後半は、莫大な財産が一つの原因に端を発し、それに悪い事が重なって、信じられない程の短い期間に消失してしまふ経緯と、経済的破綻後の伊藤の生活

が、伊藤死後二十数年を経た時期の娘達による想い出話の形式で語られる。

既に中年を迎え各々に安定した生活に融け込んでいた娘達にとって、記憶に残る父孝一の像は失意や怨念の苦悩も去り、ある達観に到ったかのような姿だ。坦々と、むしろ明るく語られる伊藤の想い出は、ほどよい愛情に包まれて、さわやかといつて良い程の後味だ。

日本アルプスの、特に冬山の峻険なまでの美しさ、そして山そのもののように自然な山男達のすぐれた描写と、重苦しい財産から解放され、むしろのびのびと育った娘達の清すがしき生活を感じさせる語り口は、本来悲劇的であるべき伊藤孝一の生涯を、むしろ快い明るい読み物に仕立て上げている。著者の熟した技量が伺われる所以である。

余談であるが、筆者はたまたま終戦直後の短い時期に伊藤一家と隣どうしに生活する縁を得ている。私は文中にある赤沼の分家に当る。

こんなわけで晩年の伊藤孝一氏を知る一人であるが、少年期の私には話す機会とてなかった。上品な顔立ちの小柄な静かな人という印象にとどまる。娘さん達では都留子さんと、亡くなった仲子さんの記憶が鮮かである。

この原稿を編集者に手渡した日、偶然著者瓜生氏の死亡記事に

が走るのである。

田口二郎

十四、慶應義塾體育會年鑑

・大正十年度

(大島亮吉寄稿二編)

慶應義塾體育會

これは表題のとおり大学体育会の年鑑であつて山の本ではない。山の本ではないが、この小冊子は近代登山の歩みのなかで、興味ある意義と内容を持った文獻の一つではないかと思う。

一つには、大正四年創立の慶応山岳部が、他の体育各部と同様に純粹のスポーツの団体として承認され、近代登山の基礎を確立しているのが認められることであり、また一つには、この山岳部の逸材の一人であつた大島亮吉氏の寄稿二編が含まれていることである。

なかでも大島さんの寄稿文は黎明期の登山やスキーについての文獻として、今では貴重なものといえるだろう。大島さんの初稿はその殆どが、部の年報「登高行」と当時札幌で発行されていた「山とスキー」誌に発表されているが、これはそれら以外のものに寄稿した数少ないものの一つではないかと思う。

内容は一編が「冬期登山」と題し、当時近代登山の一つの形式として採用されつゝあつた積雪期登山について述べたものであり、一種の啓蒙的な研究論文である。また他の一編は「スキーランナー難筆」と題し、積雪期登山の有力な用具として取り入れられつゝあつたスキーについて、特にその流派を中心に論述したものである。

これらは大島さんの著作でも比較的初期のものに属するが、いずれも格式の高い内容を構成しており、二十才を過ぎたばかりの大島青年の山に対する真摯な態度を伺うことができる。

本書は「山一研究と随想」(岩波版)の巻末著

作表にもリストアップされているが、これが山の本ではないことから、一般には殆ど目にされる機会がないと思われるので特に出品してみた。

松家 晋

十五、長谷部水哉遺稿集

和歌山県伊都郡高野山・長谷部隆諦
師遺稿刊行會

昭和五年七月十五日発行
菊判四四八ページ 非売品

この本は山の本ではないが、遺稿の中に「尼波羅入国記」が一八〇ページにわたって掲げられているために紹介するわけである。

長谷部水哉は明治十二年生まれの高野山の僧侶であるが、明治四十二年梵語学研究のためにインドのペナレスのインド中央大学に学び、大正二年一月十八日、河口慧海、高楠順次郎とともに、ネパールへ入国し、二月二十二日にペナレスに帰った。このネパール行については、ふしぎなことに慧海は「第二回チベット旅行記」中の「入蔵記」にも記載していないし、河口正氏の伝記にも何ら記されていない。高楠は地学雑誌にこのネパール行を報告しているが、詳細にこのネパール入りを書いているのが、長谷部の「尼波羅入国記」だ。カトマンドゥに着いてから、高楠、長谷部はカトマンドゥ盆地内の寺をあちこちと見て廻るが、一方、慧海は同行していない。古梵書を集めていたとされている。大正二年に長谷部はまもなく日本に帰国し、慧海はしばらくペナレスに滞在し、五月にはダージリンに赴いて、その年十二月には再度のチベット行に出発している。

長谷部と慧海との出会いはペナレスにおいてである。慧海は明治三十九年三月から大正二年五月までインド中央大学で梵語研究をしていた。四年遅れて長谷部が同大学に学ぶことになった。この「尼波羅入国記」は文体は明治調だが口語

接した。ご冥福をお祈りする。
一九八二年五月十五日刊、東京
新聞出版局、一六〇〇円
(赤沼八隅)

ら・もんだあにゆ

日本山岳写真協会編

山の写真集というものは、写真
そのものとはかくとして、一冊
の本としてのフォームが出来てい
る。ところがこの写真集は、従来
の写真集という形をとらず、一枚
ごとに取り出し、付属の額に入れ
て観賞出来るというユニークなも
のである。



三水会一〇〇回記念

高尾、陣場山行

昭和五十年五月に再発足し、本
年二月、第百回を迎えた三水会
は、去る四月十八日(日)高尾山
陣場山で記念の山行を催した。
好天に恵まれ、午前九時清滝口に
集合、全員ケーブルで山上へ。折
から春季大祭で賑う薬王院を抜け
奥ノ院で尾根道へ出る。東海自然
歩道の起点として、相武国境稜
線とは言うものの道幅も広く、今を

日本山岳写真協会といえは昭和
十四年に創立された山岳写真のバ
イオニヤの存在として古くから
知られているが、その主力メンバ
ーの力作一〇一枚(A4版)が取
められ、それぞれ解説とデータが
付されている。額は297×24
0ミリ、アクリル三枚重ねで、写
真をビスで止めるようになってお
り、写真の方もビスで止めてパッ
クすれば一冊の写真集になる。
昭和五十七年、出版科学総合研
究所発行、箱入り、A4変形、
写真一〇一枚、六五〇〇円
(山崎安治)

盛りの花明り。久々に味わう花見
気分には足どりも軽く、家族参加の
少女達も嬉々として先頭に立っ
た。一人静の咲くゆるやかな上り
下りを繰り返して十一時半には城
山へ着いた。適当にアルコールも
回り幹事心尽しのおしるこもお替
りがあった、甘党連も大満足、昼
食を了えると小仏峠へ下った。櫛
の芽など山菜を並べた茶店が昔の
ままなのも懐しく、高速道路の描
く曲線の向こうに相模湖が輝き、
丹沢、道志の空に富士が霞んでい
た。高田氏との打ち合わせでは城
山で会食する手筈になっていた河
和田屋印刷の方々が景信山から降
って来た。『三水会便り』の印刷
その他で大変お世話になっている
工場長の地家氏と木村氏であっ
た。永年のご好意に感謝しつつ高

体でなかなかおもしろい。他に訳「ネポール研
究」があるというが、未見である。高野山に尋ね
ればわかるかもしれない。

水野 勉

十六、ハラー『スイス詩の試み』

(D. Albrechts von Hallers, Versuch

Schweizer Gedichte)

まだアルプスの山々が、人間にとって有益な
ものとも美しいものとも思われなかった時代に、若
いスイス人アルブレヒト・フォン・ハラーが植物
研究のためスイス中央の山地に旅して、山々の美
しさを直感し、そこに住む人々の素朴さに感動し
た。ハラーは四九〇行に及ぶ長い詩『アルプスの
山々』を書いた。一八三二年にはじめて活字にな
った。これによってアルプスの山々は文学の素材
となった。人々は次第にスイスの山々に対して、
迷信にとらわれない目を向けるようになった。ハ
ラーの詩はヨーロッパにおける山岳文学の礎石に
なったばかりでなく、人々のアルプス観を変革す
るのにも貢献した。彼の詩が発表されなかったな
らば、アルプス登山史の出版の時期もまた遅れた
であろう。

残念ながらここにお目にかける本は一七三二年
の初版本ではない。しかしこの改訂増補第六版は
カットとともに初版の面影をつたえている。一七
五一年の刊行である。

この詩を日本語で完訳するのが私の二十年來の
夢だったが、二年ほど前にそれが実現したので、
ご参考までに添えることにした。困難な訳業を
実現したからこそ、スイス文化財団の人が秘蔵して
いた古書を記念に進呈してくれたのであった。

ハラーの詩がはじめて世に出
てから二百五十年目の今年、山
は完全に私たちの親しみの対象

になった。昨暮に西ドイツの書店から出版(オ
ーストリアで印刷・造本)された『絵画の中のアル
プス』(Die Alpen in der Malerei)を、これま
たご参考に供したい。本書の一二五頁の図版の上
部にハラーの肖像がある。右側の滝は訳書一四七
頁にうたわれているラウターブルンネン滝であ
る。ハラー詩集と最新のアルプス画集の間の二世
紀半はおどろくほど短いといえないだろうか。

宮下啓三

十七、今村正二氏作

『ルリユール』

私家版・登山史の発掘

いつも見ばえのしない本ばかり出品しているの
で、今回は眼先を変え、本の作り、つまり装幀に
注目していただきたいと思い、ここに持参したの
が今村正二氏(会員)の力作、拙著『登山史の発
掘』の私家版「ルリユール」である。この本は普
通版のほかに百十部特装本を作り、扉のカットの
日本山岳会旧会員章(実物大)を、普及版はグリ
ーの一般会員章、特装本は赤の特別会員章を用
いたのだが、そのほか私家版として二部を今村氏
に装幀していただいた。

ヨーロッパで発達した「ルリユール」(皮革装
幀)は、最近日本でも一つのアートとして注目さ
れてきているが、山の書物をその素材とされてい
る今村氏の作品に今後大きな期待をかけているの
である。

なおこの本は昨年、日本橋三越の展示会に出品
された作品である。

山崎安治

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

尾へ向かわれるお二人を見送った。景信山からは行交う人もなく、小さな起伏を隔む木陰の静かな道となり三時過ぎ明王峠下の分岐に着いた。ここで降りられる折井、沼倉、河野、の方々を囲んで一同、三水会百回記念山行を祝って万才三唱。残り全員陣場山へ向かい、ピッチを上げて四時には山頂へ立つことが出来た。夕映えの大菩薩、御坂の峰々に流れる茜いろの雲がそれは美しかった。日没と共に急に冷々として来た風に追われるように和峠へ降り、きぶしの花の昏れこのる沢沿いの道を上案下のバス停へと急いだ。

山伏の法螺ひびき来る花の尾根参加者 折井健一、沼倉寛二郎、齊藤健治、広羽 清、木村俊博、河野幾雄、高田真哉、高沢英雄、荒野康子、富田弘平、小林 碧、坂本正智、岩堀瑞子、砂田定夫、他四名、計十八名 (小林 碧)

第二十七回

山岳スキー

技術講習会

会報「山」一月号に山岳スキー講習会が指導委員会主催で、二月に乗鞍岳を中心に行なわれると掲載されていたので、楽しみにしていた。そして、三月二十一日、二十二日、連休を利用して実施するとの連絡を頂き、勇躍参加を申し出た。

三月十九日二十三時四十五分アルプス17号に乗車。新宿駅には沢山の若者達が列をなしているの、列車は余程混雑するのではないかと恐れをなしていたが、思った程のこともなく、しかも皆静かなのに一驚する。大分眠ったと思っていたら既に松本。余り寒さを感じないで島々行の電車に乗る頃、一寸雪が舞い、これは思ったが、それも僅かの間のことだった。新島々駅からバスで鈴蘭小屋へ。小屋では特別サービスで上の部屋に招じ入れられ、お茶をいただき、ゆっくり朝食をとる。小屋の付近に雪はなく、第一リフトまでスキーを担ぐ。まだ朝早いので、スキーヤーも少なく、リフトに楽々と乗る。第二、第三、第四とリフトを乗り継いで行く。下方を見ると飛燕のように滑り降りるスキーヤー。上方を見ると空模様は余りパツとしない。第四リフトを降りて、位ヶ原山荘を目指して、いよいよスキー登山だ。シールがよくきく。最初のうちは至極順調。だが登るにつれて、クラストしている所が現われる。初心者にはエッジがきかない。横滑りする。講師が親切にコーチしてくれるが、なかなか思うようにゆかない。やっと最後尾が山荘に着いたのは予定より三十分遅れて十四時三十分。その頃から吹雪となる。山荘に入れば初心者も元氣を取り戻して、一人前の顔になるから不思議だ。

思議だ。夕食は、支援隊も含めて講師連が重さをいとわず背負い上げた各種の材料に、東京でも指折りの名コックが腕を振うのだから、その美味たること。その前に、各自持参のスピリッツが胃の中に納っていたことは言うまでもない。そのせいか、山荘の夜は静かに更けてゆく。外は吹雪のようだ。明くれば、いよいよ乗鞍山頂を目指す日だ。しかし吹雪が激しい。昨夜から降り続いて相当な積雪だ。八時朝食。九時集合。出発前の足馴らしをしたところで、松

山岳図書交換会について

本年度の図書交換会は、十月二十三日(土)午後二時からと決定いたしました。

皆様の蔵書をご整理のうえ、不用な山岳書をぜひ図書交換会にご出品下さいませようお願いします。

ご出品いただける方は、図書委員会あて電話かハガキで一回下下さい。

◎アルパインクラブの蔵書目録(価格二万四千元)一部残っています。ご希望の方はお申し出下さい。

(図書委員会)

お知らせ

永主任講師から「本日の天候及び雪の状態からして、雪崩の恐れがあるの登頂は中止。上級、初級の二班に分かれて途中まで登り、各班ごとに地勢による雪の状況判断、登行、滑降の実技を練習し、山荘にて午後二時屋敷。四時から講話」との指示がある。各自二班に分かれ、講師から懇切なる指導を受ける。堅雪の上の新雪とて、グレンデのザラメ雪とは異なり、思う存分滑り、転び、楽しみながら帰宿。昼食後、別室でストーブを囲みながら、磯野講師から最近のスキー用具、特にスキー靴につ

お知らせ

比良地形探索山行

期日 昭和五十七年十月十六日(土)十七日(日)集合 十月十六日十七時比良ロッジ

〔京都駅十四時十九分発湖西線〕比良駅、江若バス比良リフト前比良山リフトおよびロープウェイにて比良山上駅へ徒歩四分でロッジ着

予定 十六日夜、懇親会と講演会「比良の断層地形」

大阪市立大学教授 藤田和夫氏

十七日、ロッジ：八雲ヶ原：武奈ヶ岳：ワサビ峠：金養峠(以

いて、また小林講師からは山スキーの実際について講話があり、活発な質疑応答が続く。終って、いよいよ待望の懇親会が食堂で開かれる。

先ず最年長の太田さんの音頭で缶ビールの乾杯。ここがコック長の腕の見せどころ。前菜、すき焼風の煮込み、吸物、各種サラダに漬物と和洋折衷の料理。ビール、ウイスキー、日本酒とこれも和洋混合。食べる程に飲む程に、談論風発、歌こそ出なかったが、その賑やかなこと。老いも若きも、男子も女子も一緒になって、時の過

後数班に分かれて下山、京都駅着十八時頃

地図 五万分之一 北小松

募集人員 六十名

費用 八千元(会員外九千元)

宿泊・食事(昼食共)・講演・保険料など

申込期日 九月十五日

申込方法 必ずハガキで氏名、

会員番号、住所電話番号記入の上、日本山岳会科学研究委宛申し込んで下さい。六十名

までの方に諾の返事とスケジュール表送りますから、折り返し予約金二千元を払い込んで下さい。

共催 関西支部 (科学研究委員会)

ぎるのを忘れ、最後の夜を心ゆくまでエンジョイする。

凍てついた窓を開けると、吹雪も止んで、太陽こそ出ていないが、先ずまずの下山日和。

予定より早い、八時三十分出発とし、途中応用訓練をしながら下山と決まる。老人組五人は下山の安全を考えて、講師二名の引率で林道を下る。緩やかな林道を気持ちよく降りる頃には太陽も顔を出して暑くなる。やっと第三リフトの乗口地点に着くと、既に若手組はグレンデでスキーを楽しんでいる。皆勢揃いしたところで無事故で終わった今回の行事を祝し、ここで一応解散とする。

鈴蘭小屋に着くと、自前と思っていたのに、カレライスにビール一本が付いての昼食を供される。講師、委員の三日間にわたるご苦労に対し、感謝をこめて、ビールの泡を口にした。

参加者 チーフリーダー・松永敏郎、会計・島海宣和、食糧・小林政志、装備・桐生恒治、村秀男、丸岡博昭、磯野剛太、マネージャー・片岡泰彦、支援・下田玲二、医師・大森薫雄。受講者 千葉重美、岡田幸子、安正、富田由起子、酒井俊一、山口節子、斎藤健治、小原俊、小原晴子、野崎真知子、田村仁子、荒野康子、林桂子、織田沢美知子、佐藤千恵子、内山城、小塚博幸、太田繁、山中富士男、ハロルド・ソロモン。(斎藤健治)

支部だより

北海道支部

総会報告

北海道支部総会は、五月二十九日、札幌雪印パーラーで開かれ、昭和五十六年度事業報告、収支決算承認、昭和五十七年度事業計画、収支予算案が承認され、引き続き支部役員を選任、次のように決まった。

支部長 大塚 武 一九一四

支部委員 兼平治水 七〇〇五

(副支部長) 山川 力 七四九一

自然保護 小林 年 六三一九

企画 新妻 徹 五八六八

記録会報 石井忠雅 八一四三

集会 浅利欣吉 五三三九

事務局 柳田涼子 七七九七

監事 川越昭夫 八一四八

三浦勝幸 八五一二

平野 明 五三六八

横江一郎 四〇四七

金井五郎 七一八六

〇五十七年度事業計画

七月二十三日～二十五日

支部山行 ニベソツ山登山

十月二日 親月会

十二月十一日 忘年会

三月十二日 ニセコスキー 等

の日程を決め、山岳映画、ドイツ

大使館より借用の「モンブラン」の山の間」を上映。功罪相償う、例の二次会、三次会へと続き、支部総会は、盛会裡に、リラの花咲く札幌の一夜を飾った。

出席者・順不同 渡部盛夫、今井三男、瀬川栄一、及川敬一、亀井秀子、柳田涼子、石井忠雅、浅利欣吉、山川 力、朝比奈英三、兼平治水、大塚 武、川越昭夫、井手貴夫、小林 年、小野 肇、野田四郎、越前谷幸平、下沢英二、酒巻吟一、新妻 徹、平野 明、牧野昭蔵、金井五郎、加藤盛一。

静岡支部

五十七年度総会報告

四月十日、珠賀美神社社務所にて総会開催、五十六年事業報告(安間荘)、会計報告(望月福次)、同監査(稲垣一郎)、二十四回紅葉会会計報告(池上和男)

議事、(一)六月十九日、本部総務行事の支部懇談会は例会の代りに現地集会に変更 (二)旅費規定の討議 (三)例年の四月総会は会計監査等の都合で来年からは五月総会に決定 (四)二十五回紅葉会、支部創立三十周年記念、本部自然保護委員会全国集会を十一月十三日(十四日)、井川青少年の家で懇親会を主体として併催する事を確定。会議を終え、五月十三日離日する、勝見幸雄氏を隊長とするガッシャブルム四峰(七九八〇尺)

第三十六回

ウェストン祭

六月五日に徳本峠を越えた者は約五百名ほどでしたが、この時期には珍しい快晴の穂高連山を眺め、シャクナゲが満開の谷を歩いて、全員上高地へ無事着くことができました。

碑前祭では恒例の催し物があり、本会側は佐々会長の挨拶、渡辺副会長の探検と山登りにおける心がまえの話、山崎(安)会員からはウェストンとウェストン碑にまつわる戦前、戦時下、そして平和な現在までの歴史が語られ、団体会員のエーデルワイスクラブの合唱、その他協賛団体の挨拶や献花、合唱がありました。

碑前祭後は実行委員会本部のある西木屋で、環境庁、営林署、安曇村役場関係者、報道関係者などを混えて午餐会となりました。

今回のウェストン祭当日は、稀に見る好天に恵まれ、上高地一帯は終日車で混雑し、駐車違反の車などが道路を塞ぐためもあった、上高地から釜トンネルを抜けるのに三時間かかるといった混乱を示しました。すでに十年程前に発行された歳時記にす

ら初夏の行事として載っているのですから、人出の多いのは当然かもしれませんが、昔、黒田孝雄会員が心配していたようなウェストン茶屋だの、場合によっては夜店まで出やしないかといった杞憂さえ感じました。この辺の自然を守る法律は廃止しよう、など言い出す政治家の現われのないよう願ひながら松本へ向かいました。

参加者・順不同 佐々会長、同家族、渡辺副会長父子、折井、山崎(安)、森谷、沼倉、網倉父子、伊藤、山口(豊)、吉村(徳)、河村(徳)、同家族、小原(徳)、岡沢(徳)、エーデルワイスクラブ。八信濃支部、奥原支部長、高山顧問、蒲生、岩佐、村田、下崎、三溝、飯村、塩原、東、阿部、一志、稲越、金井、北林、小泉、田中(徳)、塚原、中村、百田、宮原、田中(徳)、井口、角田、福井、日置、早乙女、小林(徳)、金子、百瀬(二)、百瀬(孝)、赤羽、原、西牧、青木、市東、吉武、波田山岳会(五名)、池田夫妻、小松、ガルデラ、安曇村、環境庁、営林署、信毎他報道関係、アルプス少年少女合唱隊、日本花いっぱい運動推進団体等。

(岡沢祐吉)

西壁無酸素、全員登頂を目指す八
隊員の成功を祈る壮行会に切り変
える。

支部長 山本朋三郎
新役員 安間 荘
池上 和男
望月 福次
勝見 幸雄
杉本 宣明
田辺 恵造
山口 亮
会計監査石間 信夫
稲垣 一郎

熊本支部

春季総会報告

今年の総会は去る五月二十二日
(土)、福岡県は旧秋月藩の城下町

を見下ろす甘木市秋月町の旅館秋
月荘で会員十三名参集して開催さ
れた。今年は久びさに福岡県下の
山を選び、翌日は近くの古処山(八
六〇)屏山(九二七)への
登山を楽しむに、午後六時から始
まった総会の議事を終っても、懇
親会は夜おそくまでつづき、静か
な山峡に和やかな杯が交された。
翌二十三日(日)は全員で古処
山、屏山の登山。このところ晴天
つづきの西日本は、この日も快
晴、樹々の緑が一段と鮮やかに見
えた。その中を左に右に溪流の音
を聞きながらゆっくり登ってゆ
く。明るい感じのよい谷間は八合
目の水舟まで豊富な水量である。
そのためか杉の木立は真直に伸
び、足元には色んな植物が多く、

シヤガ、ホウチャクソウなど可憐
な花を咲かせていた。
石灰岩の露出とツゲの巨木が現
われてくると頂上は間近。九時
四十分三角点のない頂に立ち、巨
岩の上から三六〇度の眺望をほし
いままに屏山へと向かった。
屏山への路は、古処の下りが少し
急で、あとはなだらかな稜線を三
角点のある頂上へ。頂上で今西式
ヤッホーを三唱して下山、また元
の古処の頂を越して午後二時二十
分登山口へと下りた。
低い山で案外早く下りられた
が、結構変化があり良い山であっ
た。春秋二回行なう支部の懇親登
山も回を重ね、九州管内の山に限
られるが、すっかり参加者の顔も
なじみ、欠かせないものになって

名誉会員

津田周二氏逝去

名誉会員、津田周二さんが去
る四月十九日夜、胃がんのため
七十九年の生涯を終えられた。
昨年五月に胃潰瘍といことで入
院、胃切除、そのあと白内障、
ヘルニヤなどが続発、立派な体
格が随分やせられて次第に元氣
をなくされていった。五月の胃
潰瘍というのが実は胃がんであ
った。十一月に少年時代からの

畏友、名誉会員の水野祥太郎博士
から、胃がんから身辺の整理を
したほうが良いよ、と本人にいう
て戴きました、ということを換末
亡人から承った。
山岳会には昭和二十年十月に入会
(会員番号一〇四九)理事、評議
員、関西支部長などを歴任された
ことは周知のことだが、第一次R
Cの理事として活躍、関西支部

設立には故藤木九三氏を輔けて
大いに働いたと聞いている。神
戸では登山界の中心の人であ
ったことは誰れ知らぬ人はいな
い。戦後、兵庫県山岳連盟設立
のあと副会長、会長として昭和
四十二年まで後進の指導に尽く
された。
告別式は四月二十一日正午か
ら信仰しておられた神戸ハリス
トス正教会において、折悪しく
春雨の降りしきる中で、式場
に入り切らない程の多くの知友が
集まり、厳粛に執り行なわれ
た。(前田 浩)

会務報告

5月理事会

5月10日午後6時30分
本会・ルーム

出席者 佐々会長、渡辺、田口副
会長、田村、神崎、伊丹、西村、
川上、高橋、岡沢、高本、赤松、
河村、松家、水野、鈴木、中村各
理事、嶋原、太田各監事、村木、
大塚、松丸各評議員
◎報告事項
▽各委員会報告、(資料配布)口
頭報告のうち主な問題、(1)本会蔵
書のカード作成作業がほぼ完了、
利用体制準備中、(2)五十六年度に
特別購入した古洋書(一三七冊)
のリスト完成、若干重複するもの
があり、その処理は検討中、(3)会
員への通信販売を試みた(売上十
三万円強)、(4)故吉阪会員の山岳
書の寄贈を受けた、(図書委)。故
別宮会員作の16とスチールの寄

贈を受けた、整理中。秩父宮家よ
り故殿下ご所蔵のお写真(六葉)
を本会に賜った、(フィルム委)。
上高地の山研は五月一日より開館
宿泊条件前年通り。国際登山交流
の要請が多くなっているが、従来
のやり方(例西独、韓国、印度
等)では参加会員の負担に頼って
いるので問題が多い。今後、国際
交流は本会にとって重要な活動分
野であるから、会全体の問題とし
て検討してほしい、(青懇、海外
委)。津田周二、坂本直行会員が
急逝された。F・マライニ会員
(四一七七番)が春の叙勲を受け
られた。四月評議員会報告、(総
務委)。

◎審議事項

▽海外遠征隊推薦の件、(1)一九八
五・カンチェンジュンガー東京都
立大学山岳部、(2)訪中華親善登山
隊―静岡支部の二件、了承
▽特別購入洋書の一部と秩父宮家
寄贈写真を総会席上展示の件、
了承

ルーム日誌

(57年5月)

6日(木) 婦懇研究会

28 20 19 18 17 15 14 12 10
 日 日 日 日 日 日 日 日 日
 (金) (木) (水) (火) (月) (土) (金) (水) (月)

理 事 会
 図 書 委 員 会
 支 部 長 会 議
 会 員 会 議
 自 然 保 護 委 員 会
 婦 懇 委 員 会
 三 水 会
 会 報 編 集 委 員 会
 科 学 研 究 委 員 会
 今 月 の 来 室 者
 418 名

図 書 受 入 報 告

図書委員会

(購入)

昭和 57 年 4 月受入図書 (つづき)

22. Charles S. Houston "Going high: The story of man and altitude" 1980 (購入)
 23. Peter Boardman "The shining mountain: two men on Changabang's West Wall" Hodder and Stoughton 1979

24. Earlyn Church ed. "The American Alpine journal index 1929-1976" The American Alpine Club 1979 (購入)
 25. The Royal Government of the Kingdom-Bhutan "Bhutan" Japan Bhutan Friendship Association of Kobe 1982 (神戸日本ブータン友好協会寄贈)

語句の正誤

六月号会

報四四四号

の十一ペー

ジ、住所・

住居表示変

更欄の六行

目、佐藤敏

彦とあるの

は佐藤俊彦

氏の誤りで

すので、訂

正させて頂

きます。

あとかき

会報は会

員相互の連

絡を深める

という役目も、当初から持ってい

ますので、地方においての会員に

は特に利用して欲しいのですが、

同時に近くの支部との連絡もと

親交を深めて頂きたいと思いま

す。特に支部に所属されている会

員諸氏にはこの点をよくご留意頂

き、行き違いなどのないようお願い

いたします。

(編集)

昭和五十七年七月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五十四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 佐々保雄

編集代表 岡沢祐吉

電話東京(261)四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所

株式会社 技報堂